



静かな箱舟 — 異常気象の星で生きるために

異常気象と、生のリズムの乱れについて

近年の空は、どこか様子が違う。

雨は降るべき時に降らず、突然の暴風雨に襲われる。季節の歩みが乱れている。そのわずかなずれが、やがて生きものたちの命の鎖をゆっくりとほどいていく。

異常気象は、作物や田畑の成長に深く影を落としている。

かつて自然が教えてくれたリズム——芽吹き、開花、実り——その循環が崩れ始めている。

共に生き、助け合ってきた生物たちの関係が、静かにほころんでいくのだ。

たとえば、春。

果実は花が咲いても、受粉を担うミツバチたちがまだ巣の奥にいる。

成虫になれず、彼らの羽が動かないのだ。

その結果、花は受粉できず、実を結ばない。

やがて、その果実は姿を消す。

百年後の子どもたちは、もしかすると「リンゴって何？」と尋ねるかもしれない。

一方で、ミツバチもまた困難にある。

花粉を集められず、巣に食糧を蓄えられない。

卵を産んでも、幼虫を育てる蜜がない。

巣穴に蓋をする材料を得れず、外敵が入りやすくなる。

餓死した幼虫が残る巣の中に、風が通り過ぎていく。

自然の小さな歯車が、静かに軋みを上げている。
こうした連鎖の果てに、マクロな生態系——
いわば「地球という生命の仕組み」そのものが崩れていく。

人間の営みもまた、その小さな営みの上に成り立っている。
ハチの一振りの羽音があってこそ、私たちは果実を口にできる。
人が筆で受粉を試みても、ミツバチのような繊細な作業はできない。
わずかな違いが、やがて果実の形と味を変え歩留まりを下げる。
それは市場の価格に響き、農家の経営をも揺らす。

自然の手の代わりを、人の手が完全に果たすことは難しい。
では、私たちは何をすべきだろう。
共生のサイクルを取り戻すために、ミツバチたちが安心して受粉できる環境を整える。
そのためには、巣箱の中の温度や湿度、気圧を自然に近づける必要がある。
人が作り出す環境制御システムが、彼らの世界を守る壁となるかもしれない。
泥や巣材、蜜や花粉を安定して得られるよう支援する。
それが、共に生きるということの現代的な形なのだろう。

この「整える」という行為こそ、
共生を維持するための、人間の新しい祈りである。
今、異常気象は人間にとっても避けられぬ課題になった。
野菜も魚も、自然の中では安定して育たなくなっている。

そのため、私たちは自然を模した環境——
いわば「小さな地球」を建設し、野菜や魚を育て始めている。
そう！「小さな箱舟」を人間のために創っているのだ。
野菜でいえば、土に代わって水で育てる水耕栽培が広まりつつある。
だが現実には、栽培が容易な葉物野菜ばかりが選ばれている。
理由の一つは、いちごのような繊細な果菜類を育てる熟練者が少ないことにある。
高度な設備を整えても、肝心の「人の知」が追いつかない。
その結果、多くの施設が採算を合わせられずに終わる。
技術だけでは、自然の理を補いきれないのだ。

けれど、希望もある。
AIと環境制御装置の力を借りれば、
（AIは一瞬にして各生物の成長に応じた環境要素を世界中から集め

適正値を得るという人間には出来ない機能も持つ)
各生物の成長に必要な成長時期に応じた光・温度・湿度・CO₂を、正確に再現できる時代が来ている。

それは単なる機械化ではなく、
人と自然の知恵がもう一度手を取り合うための道具かもしれない。

異常気象の中で、生きものたちが生き延びている今のうちに、
それぞれの適性環境を記録し、学び、次の世代に残すべきだ。
それが、私たち人間に課せられた「復元の義務」だと思う。
壊してしまった自然の秩序を、もう一度取り戻すために。

結びに

ミツバチの羽音の奥には、
人と自然が長い時をかけて育ててきた「約束」がある。
それを守ることこそ、
いまを生きる私たちに託された、
静かな使命なのかもしれない。

251027 KEIICHI

<https://note.com/keiichi446/n/nfcc0cbe4d6c8>

<https://iot-tech-lab.wrapas.site/>